

## 論 文

# 南方熊楠の採集・観察に見る対象との同一化について —粘菌との関係を軸に—

唐 澤 太 輔\*

## 1.はじめに（本稿の目的）

南方熊楠（みなかたくまぐす 1867-1941）は、生物はもちろん、さまざまな珍品・奇品、あるいは文献や伝承などの「採集（収集）」に莫大なエネルギーを費やした。特に粘菌や隠花植物の採集に対する情熱は超人的であったとさえ言える。現在保存されている熊楠が集めた標本は、藻325種類、シダ190種類、粘菌6,000種類、キノコ6,575種類に及ぶ。そこには単なる「コレクター（収集家）」の域を超えた何かを感じさせるものがある。また熊楠は「観察（写生・記録）」にも固執した。驚異的な集中力と持続力で観察し、写生・記録を行った。熊楠の描いた菌類彩色図譜は約3,500枚に及ぶ。粘菌の図譜も相当数描いたようだが、それらは不幸にも精神を病んでいた息子・熊弥によって修復不可能なまでに破棄されてしまった。

執念とさえ思える「採集」行為と、粘着的とさえ言える「観察」行為。南方熊楠という人物を特徴付けるこれら2つの行為から我々は何を知ることができるだろうか。本稿では熊楠と粘菌の関係を軸に、彼の「採集」と「観察」について、精神分析における「取り入れ同一

化（introjective identification）」と「投影同一化（projective identification）」を手がかりに考察していく。

以下ではまず、熊楠にとって「採集」・「観察」とはどのような意味を持つものだったのかを述べる。そして本稿を進めていく上でキーワードとなる「取り入れ同一化」と「投影同一化」について解説する。その上で「採集」と「取り入れ同一化」、「観察」と「投影同一化」の関係を、図を用いて考察する。そして次に、熊楠が対象（粘菌）に何を見ていたのかをC・G・ユングの言う「アニマ（anima）」を中心に述べる。さらに熊楠と対象との「同一化（統一）」と「分裂」、「区別」について、ヘーゲルの「無限性（die Unendlichkeit）」をヒントに考える。最後に、熊楠と対象の「距離」に関して述べる。日本民俗学の父・柳田國男によって「日本人の可能性の極限」とまで評された南方熊楠という人物の特異性、あるいは彼が天才・超人と言われる所以は、対象との「距離」のとり方にあったのではないだろうか。

\*早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程2年

## 2. 熊楠にとっての「採集（収集）」と 「観察（写生・記録）」の意味

熊楠が「採集」・「観察」行為に超人的なエネルギーを費やした理由は何だったのか。当然、「日本の菌類7,000種を採集して、カーチス、バーレーをしのぎたい[鶴見 1981: 60]」や「おもしろくてたまらないから[鶴見 1981: 68]」といった理由だけでは不十分である。熊楠にとっての「採集」・「観察」の意味を考察することは、南方熊楠という人物そのもの、また彼の人格の根底にかかる最も重要な事項であり、決して素通りすることはできないものである。

なぜ熊楠は膨大な数の粘菌や隠花植物の新種を採集しながらも、「裸名（学会誌に未発表の彼独自の分類番号）」のままにしたのか。なぜ粘菌や隠花植物に関する知識を広めるための本や論文をもっと発表しなかったのか。論文がほとんどない以上「植物学者」と呼ぶべきではないのではないか。正式な分類法にのっとって記録しなかったのはあまりにも無責任ではないか。<sup>1)</sup>

これまで熊楠に対するこのような議論や批判が何度もされてきた。しかし、そもそも熊楠にとって「採集」や「観察」は、業績を残す為や名声を得る為に始めたものではなかった。熊楠が「採集」と「観察」に固執した本当の理由、それは彼自身によって端的にそして赤裸々に、以下のように述べられている。

小生は元来はなはだしき疳積持ちにて、狂人になることを人々患えたり。自分このことに気がつき、他人が病質を治せんとて種々遊戯に身に入るもつまらず、宜しく遊戯同様の

面白き学問より始むべしと思ひ、博物標本をみずから集むることにかかりり。これはなかなか面白く、また疳積など少しも起こさば、解剖等微細の研究は一つも成らず、この方法にて疳積をおさうるになれて今日まで狂人にならざりし。(1911.10.25 柳田國男宛書簡)[南方 1971: 211]

上記書簡で「小生は元来はなはだしき疳積持ちにて」また「自分このことに気がつき」と述べられていることからも分かるように、熊楠は自身の自我の不安定さを自覚していた。そのような彼にとって、「採集」（博物標本をみずから集むこと）と「観察」（解剖等微細の研究）は、自我が崩壊し「狂人」になることを怖れての、いわば「防衛機制（defense mechanism）」<sup>2)</sup>であった。

熊楠の「採集」は「防衛機制」の1つである「取り入れ（introduction）」に、「観察」は同じく「投影（projection）」に深く関連している。ではなぜ熊楠は自分の中に対象を取り込んだり、自分を対象へ投げ入れたりしたのだろうか。

それは端的に、欠けるところの無い安定した完全な理想の自己像を求めてのことであったと思われる。

熊楠は、自身に欠けた部分、あるいは自分で認識している表面上の性質とは正反対の性質などを採集・観察対象に見出し、それらと一体化しようとした。それは不安定な自我の「防衛機制」であり、対象と一体化あるいは同一化し、自分に欠けた部分を補完することで安定を図ろうとする人間の心の機能（function）である。不安定な自己は対象において、自己自身の欠如した部分を見る。対象の内に、本来自己自身の

本質に属しながらも自己に欠けているものを見る。そして「取り入れ」や「投影」を通じて、自己の欠けた部分をもつ対象と一体となることで、完全性を希求するのである。

しかし、もし熊楠が対象と完全に同一化し、そのままの状態に留まっていたら、彼の自我は消滅し、逆に「狂人」になっていたに違いない。完全な同一化は、自我の消滅・主体の無化・人格の死を意味する。つまり自分の欠けた部分を補う点において同一化は理想とされ、目指されるべきものであるが、一方で主体が完全に対象と同一化しその状態に留まることは、主体の無化・人格の死を意味し、忌避されるべきものでもある。

熊楠はあらゆるものを「採集」し「観察」した。彼の目指すものは、まさに「一切智」（全てを知ること、あるいは全てを知る人）であった。しかし「あらゆるもの」と言っても、そこにはやはりある種の傾向が見られる。粘菌を始めとして熊楠が好んで研究対象としたものは、どれをとってもいわば「熊楠的」もしくは「粘菌的」なものばかりであった。曖昧で猥雑で非合理的—このような特性を持つ対象を熊楠は非常に熱心に研究した。そしてそれらを採集し、あるいはそれらに関する伝承や文献などを渉猟し筆写・記録した。

つまり熊楠は対象を通じて、（曖昧で猥雑で非合理的な）自分自身を見ていたと言えるのではないだろうか。しかし熊楠は、自分自身を科学的・論理的思考の持ち主、また合理主義者だと考えていたふしがある。彼を「曖昧、猥雑、非合理的、没論理的」な人物だと考えるのは、特に後世の我々であり、決して彼自身が最初からこのことを自覚していたわけではなかった。

これらに関しては4章で述べることにする。

### 3. 「取り入れ同一化」としての「採集」、「投影同一化」としての「観察」

熊楠は「採集」・「観察」を通じて、対象と「同一化」しようとしていた。しかし一言に「同一化」と言っても、そのプロセスにおける方向性は異なる。つまり熊楠の「採集」は、対象を主体に取りこむこと（対象の主体化）による「同一化」＝「取り入れ同一化」であり、「観察」は、主体を対象へ投げ入れる、つまり主体が対象へ入りこむこと（主体の対象化）による「同一化」＝「投影同一化」であると言うことができる。「投影同一化」とはメラニー・クライン（Melanie Klein）によって提唱された概念である。そしてそれと一対をなすものが「取り入れ同一化」である。

ここで簡単に「取り入れ同一化」と「投影同一化」について説明しておく。

「取り入れ同一化」とは端的に言えば、対象を自己に取り入れて融合し、そうすることで満たされない感情を満たそうとする心の働きと言える。また精神科医・小此木啓吾は、「取り入れ同一化」はS・フロイトの言う「自己愛的同一視（narcissistic identification）」と同じことであると説明している[小此木 2002: 165-166, 氏原ら編 1992: 1004]。ではその「自己愛的同一視」とはどのようなものか。それは

……自他の識別が成立した後に、対象そのものの、あるいは対象の特性を自己の中に取り入れて自己の一部とみなす同一視 [氏原ら編 1992: 1003]

であるという。因みにフロイトによると、この同一化は、性的発達段階における最初の口唇期の流れをくんでおり、渴望し尊重する相手を食べてしまうことによって、その対象を自らへと同化してしまう心理に由来しているという。

一方、「投影同一化」とは、

……対象に自己を投影し、投影された自己と対象とを同一視する機制である。もう少し具体的に言うと、自分の心の中の願望や衝動を自らの中から排出して、相手に投げ入れて投影し、あたかもその相手がその願望や衝動を抱いているかのように知覚するという仕組みである [小此木 2002: 165]

と言われている。つまり、対象の中に自己が意識していないような部分を投影し、その対象と同化しようとする心の働きと言うことができるだろう。また精神分析家のドナルド・メルツァー (Donald Meltzer) は、「投影同一化」を「侵入的同一化 (intrusive identification)」(傍点-唐澤) と呼ぶべきではないかと提案している [氏原ら編 1992: 983]。因みに日本神話・民俗学の研究者であるカーメン・ブラック (Carmen Blacker) は、論文「南方熊楠 無視されてきた日本の天才」において、

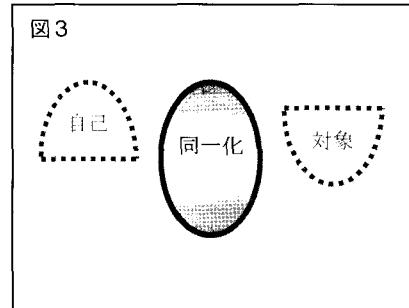
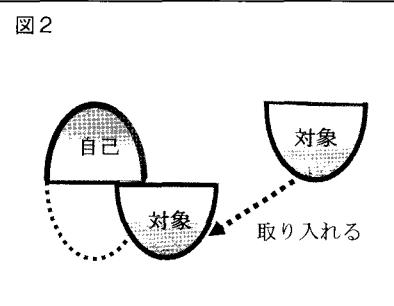
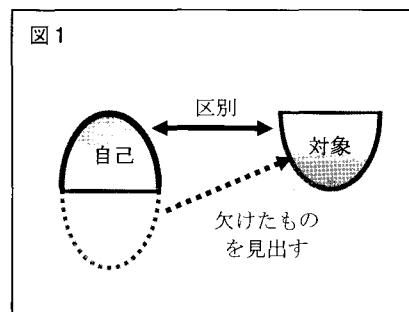
南方の動機は、昆虫や、鳥、獸、植物、菌類のかたちをとった生命というものに対する、無私無欲の投入だったようと思われる。  
(1983 英国民俗学会機関紙『フォークロア』94巻2号 高橋健次訳) [飯倉ら編 1991: 460]  
(傍点-唐澤)

と述べている。

つまり「取り入れ同一化」が、自己に対象を「摂取」するのに対し、「投影同一化」とは自己を対象へ「投げ入れる」こと、自己が対象へ「侵入する」ことだと言うこともできるだろう。

以上を踏まえた上で、以下では「取り入れ同一化」と熊楠の「採集」、「投影同一化」と熊楠の「観察」の関係を、図を用いて考察していく。

図1から図3は「取り入れ同一化」の過程を示したものである。まず、対象と区別されてある自己は、自己自身の欠けている何かを対象に見出し (図1)、それを取り込もうとする (図



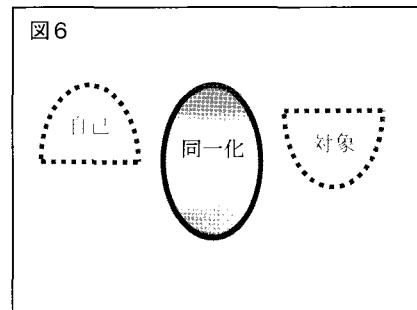
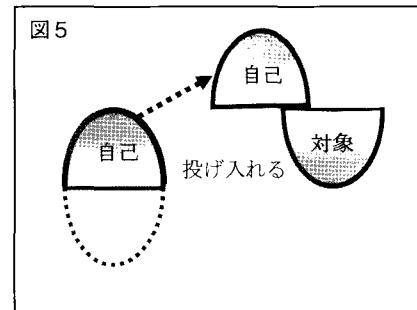
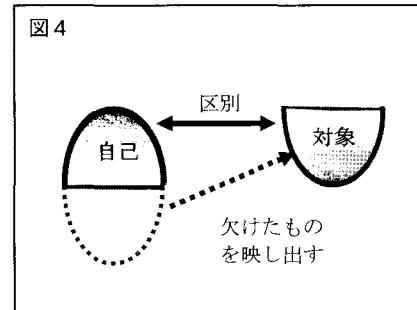
2)。そして自己は対象を取り入れて同一化し、心の安定を図ろうとする。しかし対象を完全に取り込み同一化しその状態に留まることは、自己と対象が共に消えてしまうことを意味する(図3)。

熊楠の「採集」もこの「取り入れ同一化」と同様であると考えられる。例えば熊楠と粘菌の関係で考えてみると次のようになる。まず熊楠は粘菌に自身に欠けているもの、あるいは正反対のものを見出し(図1)、それを「採集」することで自身に統合しようとした(図2)。

自己(熊楠)が対象(粘菌)を取り込もうとするのは、あるいは取り込めるのは、自己が向かい合っている対象が、もともと自己そのものだからである。自己(熊楠)と対象(粘菌)はそのような(もともと統一された完全な状態が分裂した)関係においてある。「同一化」とは両者が一つの場に溶け込むことでもある。そして溶け込んで一つになった場合にはもはや自己も対象もない(図3)。

図4から図6は「投影同一化」の過程を表したものである。自己は自分の心の中にある願望や衝動を対象に投影し、あたかも対象がその願望あるいは自己の欠如した部分を持っているかのように知覚する(図4)。そしてその対象と同一化するために対象へ自己を投げ入れる(図5)。自己と対象が完全に同一化すると、自己と対象は溶け合い消える(図6)。

これも熊楠と粘菌の関係で考えてみると、次のようなになるだろう。熊楠は粘菌に自分の願望や衝動(これらについては次章で詳述する)を投影していた(図4)。そして熊楠は粘菌へ入り込むように「観察」を行うことによって同一化しようとした(図5)。また熊楠と粘菌が完



全に同化したとき(場に溶け込んだとき)、両者はもはや存在しない(図6)。

ここでさらに考察しなければならないことは、主に2つある。

- ① 熊楠が「採集」「観察」した対象(粘菌)に見出していた自身の願望・衝動・欠如した部分とは何か
- ② なぜ「同一化」(統一)した状態から自己と対象との「分裂」は生じ、そして再び「統一」へと向うのか

以下では、①をC・G・ユングが述べる「アニマ」をキーワードに考察する。そして②を

ヘーゲルの言う「無限性」を手がかりに考察する。

#### 4. 熊楠が粘菌に見えていたもの

熊楠が好んで研究対象として選んだものは、前述したように曖昧で猥雑、非合理的なものであった（例えば幽霊、性の問題を取り上げた民俗学、食人肉の歴史など）。その最たるもののが粘菌だったと言える。それを一言で言えば「アニマ」的要素を持つものと言うことができる。特に粘菌のライフサイクルの中でも熊楠が関心を持ったのが「原形体」の時期であった。原形体は気まぐれにその美しい色彩を変化させ（環境条件が変化すると原形体の色も変わる場合があるが、色の変化の目的は未だ不明である）、アメーバのようにドロドロと広がりながら動き、バクテリアなどを捕食する。そしてそれは突如としてキノコ状の「子実体」へと変化する。

熊楠は、特に各地を転々としたアメリカ時代、そして大英博物館に通いつめていたロンドン時代には、後世に言われるような民俗学者や博物学者というより、彼自身はむしろ自然学者を自認していた。当然熊楠がこの頃頻繁に、科学雑誌の権威である『ネイチャー (Nature)』に論文を何度も寄稿している点からも、我々がそれを疑う余地はないだろう。アメリカ時代には、『科学論文集』と名付けた抜書ノートなどを作成している。また当時ロンドンで流行っていた降霊術やオカルティズムを批判する書簡などを友人・土宜法竜（どぎ ほうりゅう）へ送ったりもしている。そこには自然学者・南方熊楠の姿を見ることができる。例えば法竜に対して以下のように、近代科学の重要性を切々と述べたりもしている。

仁者、欧洲の科学哲学を探りて仏法のたすけとせざるは、これ玉を淵に沈めて悔ゆることなきものなり。小生ははなはだこれを惜しむ。（1893.12.24 土宜法竜宛書簡）[南方 1972: 149]

しかして仁者いたずらに心内の妙味のみを説いて、科学の大効用、大理論あるを捨つるは、はなはだ小生と見解を異にする。（1893.12.24 土宜法竜宛書簡）[南方 1972: 153]

では、論理的、分析的、理性的、自然科学者の思考を重視していた熊楠が、なぜ粘菌という極めて非合理的で神秘的、気まぐれな生物に特別な関心を持ったのか。

それは、熊楠が粘菌という他者に、自身に潜む「アニマ」を見えていたからではないだろうか。ユング心理学において「アニマ」とは男性の深層心理に潜む女性的性質を言う。

ペルソナとアニマは相補的に働くものである。男性の場合であれば、そのペルソナは、いわゆる男らしいことが期待される。彼の外的態度は、力強く、論理的でなければならぬ。しかし彼の内的な態度は、これとまったく相補的であって、弱弱しく、非論理的である。[河合 1976: 197]

河合隼雄がこう述べるように、男性が「男性らしさ」を強調する外的態度（ペルソナ）を持つとき彼の自己は、「男性らしさ」とは正反対の、彼の内にある「女性らしさ」（アニマ）によって平衡が与えられている。そしてその「アニマ」は人格化されたイメージとして夢などに

現れたり、実際の女性に投影されたりする。時に物事や物体がその役割を果たす場合もあるという[河合 1976: 208]。また河合は、「アニマ」は男性の心の中の抑圧されたものと結びつきやすいとも述べている[河合 1976: 202]。

熊楠の表面上の、もしくは彼自身が自覚していた科学的・論理的・分析的性質は、いわば男性的要素（ペルソナ）である。また熊楠は「女嫌い」を公言していた。大英博物館では女性の甲高い声が気に食わず、それを制したことが原因で騒動を起こし、同館を追放されたりしている<sup>3)</sup>。また女兒や老女に暴力を振るうことさえあった<sup>4)</sup>。

しかしそのような女性に対するあからさまな嫌悪感、威圧的态度こそ、彼の内面の抑圧された部分、劣等なものの裏返しでもあったと考えられる。そして熊楠の、そのような過激とも言える外面的態度の深層にあり、それと対極をなす、あるいは相補性をなす「アニマ」は実際の女性ではなく、粘菌に見出されていた。

図7は、熊楠が粘菌に、自身の影とでも言うべき「アニマ」を見出していることを表すものである。熊楠が自身で認識していなかった「アニマ」は、「熊楠全体」の半分であり、いわば彼の「欠如した部分」、「欲望される部分」、「願

望」であった。(だからこそ熊楠は粘菌に並々ならぬ関心を抱いた。) 熊楠はそれらを対象（粘菌）に見出し、「採集」を通じて自己へ取り入れたり、あるいは「観察」を通じて対象へ自己を投げ入れたりした。そうすることで「同一化」しようとした。もしくは完全性へ向おうとしたと言えるだろう。つまり熊楠が対象として選んだ粘菌は、彼の無意識にある「アニマ」が具現化されたものだと言えるのではないだろうか。

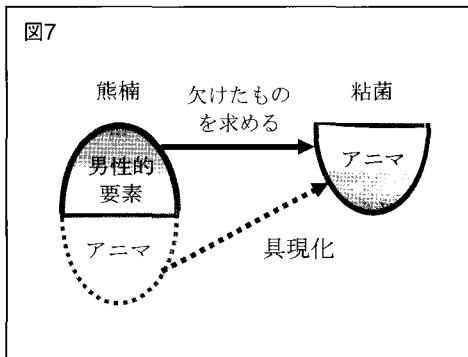
## 5. 「統一」と「分裂」

自己（熊楠）と対象（粘菌）は、同一化し完全性（統一、同一のもの）へ向う。というより、むしろ自己と対象は同一のものが分裂したものなので、同一のもの（統一）へ帰還すると言うべきであろう。そして再び分裂する。

自立的な諸々の項は自分だけで〔自分に対して〕在る。が、この自分だけでの有〔対自存在〕はむしろそのまま統一に反照することでもあり、またこの統一は自立的な諸々の形態に分裂することでもある。[Hegel 1807: 136 横山 1997: 211]

同一のものが自分を二分して対立したものになる。その対立したものは各々で別々に自立して存在するように見えるが、他方は一方のいわば片割れであり、また一方は他方なくしてはありえない。一方は他方が存在するための、他方は一方が存在するための契機である。そして他方が一方自身を含み持つという点において、両者は「区別であって区別でないもの」(何ら区別でないような区別[Hegel 1807: 125 横山 1997: 197]) であると言える。だからこそ両者は分裂

図7



してもすぐ統一（同一のもの）へ帰還することができる。そしてこの循環は限り無く続く。熊楠はこの統一→分裂→区別→帰還→統一…の限りない循環に関連した、興味深い言葉を残している。

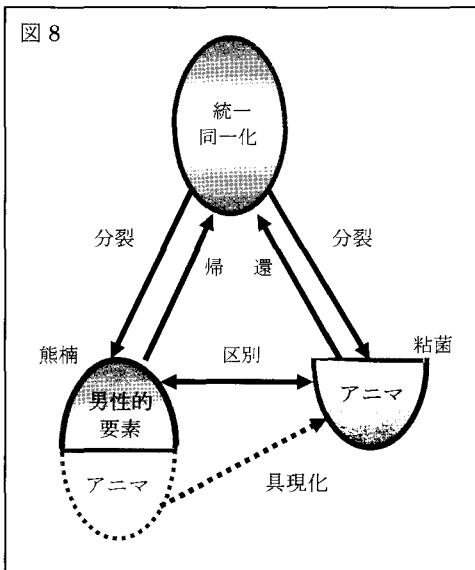
万物は悉く大日より出、諸力悉く大日より出ること第二以下の状にて見られよ、万物みな大日に帰り得る見込みあり（1902.3.26（推定）土宜法竜宛書簡・2004年発見新資料）[松居ら編 2005: 197]

熊楠は大日如来から万物（熊楠、粘菌）は分裂し現われ、それらはまた大日如来（統一）へ帰ると言うのだ。（この新資料における言葉は、熊楠の知の体系である「南方曼陀羅」の説明において彼の言う「大日如来の大不思議」を今後考察していく上で重要なヒントになり得ると思われる。本稿ではこのことについてはこれ以上踏み込まず、新資料を今後さらに精査した上で改めて考察することにする。）

粘菌と熊楠は、統一が分裂したものである。粘菌は熊楠の「アニマ」であり、つまり熊楠自身の影である。否、「アニマ」なくしては、全的人格は成立し得ないのであるから、「アニマ」として粘菌は熊楠そのものであると言っても良い。粘菌は熊楠と区別されて在りながらも、それは熊楠であるということになる。熊楠と粘菌が同一化し、統一へ帰還する。そして統一は再び分裂する（図8）。

ではなぜ統一から再び分裂が起きるのか。

統一は、絶対に否定的なつまり無限な統一であるから、分裂する。そしてこの統一が存立



であるのだから、区別もこの統一においてのみ自立性を保持するのである。[Hegel 1807: 136 横山 1997: 211]

統一とは、言ってみれば、何かと何かが等しいということ（一つになっていること）だが、それにはまず何かと何かに分かれるという分裂が前提としてなくてはならない。つまり統一が分裂するのは、それ自身にもともと分裂を含んでいるからだと言える。統一から分裂した各々は、前述した通り区別なき区別である。言い換えれば、それは「同名のものの区別であり、その本質は統一〔1つであること〕」[Hegel 1807: 125 横山 1997: 197]である。

熊楠と粘菌は全く関係のないもの同士ではなく、粘菌は熊楠が無意識に持っている「アニマ」が具現化されたものである。つまり、各々は「ある他者の反対ではなく、純粹の反対」[Hegel 1807: 125 横山 1997: 199]ということである。そして熊楠が求めた同一化とは、彼の絶対に否定的なもの、つまり自己を完全に否定（区別）

した相補性を成すもの（＝表面上の熊楠とは正反対の「アニマ」としての粘菌）との統一であった。

統一は区別がなければありえないものである。逆に統一があるからこそ区別項が成り立つとも言える。統一と区別は循環し完了することはない。統一は区別項の本質とでもいべきものだから、統一がなければ区別項は存在しないと言える。また統一は区別項が希求する理想でもある。逆に理想を希求するために区別項が成り立つ、つまり分裂が生じるとも言える。

熊楠は粘菌と同化することを求めていた。なぜならそれが彼の無意識にある「アニマ」（片割れ）であったからだ。そしてそれを取り込むこと、あるいはそれに自身を投げ入れることで、熊楠は安定した理想の自己（完全性）へ帰還しようとしていた。また、求めるべき完全性あるいは統一のために、熊楠と粘菌は存在した。

「同一化」は理想である一方、恐れるべきものもある。熊楠が自分の欠けている部分を見出し、粘菌を取り込んだり（取り入れ同一化）、粘菌へ自分を投げ入れたり（投影同一化）して、完全に同一化すれば、粘菌という対象は消えてしまう。対象が消えるということは、主体としての熊楠が消えることでもある。なぜなら対象があつての主体だからである。主体の無化は人格の死であり、それは熊楠がもはや熊楠という人格を失った「狂人」になることを意味する。

では、分離した状態が「常人」ということになるのであろうか。しかし熊楠は分離した状態でも、つまり「採集」や「観察」に没頭していないときでも、「変人」・「奇人」と呼ばれていた。これはどういうことであろうか。

## 6. 「近さ」と「遠さ」

「気に入らないものには反吐を吐きかけた」、「大英博物館内で暴力事件を起こした」<sup>5)</sup>など、熊楠の奇人伝は数多くある。なぜ熊楠はこのような「逸脱」した行為をとったのか。「逸脱」とはつまり他者との「距離」が極端に離れてしまうことである。それは他人の気持ちに鈍感になり感情移入ができなくなり、そしてその結果、反社会的行動へつながることになる。極めて自己中心的・自己愛的（narcissistic）になるとも言えるだろう。特に熊楠の暴力的「逸脱」行為は、他者への共感力の欠如を感じさせる。また彼の日記の記述には、このような行為に対して反省・自戒の言葉は一切見られず、むしろ「自慢」しているかのようにさえ感じられる<sup>6)</sup>。またこのような「逸脱」が集中して見られる時期には、彼の日記からは「あれほど多かった植物採集にかんする記載がぱつりとなくなる〔近藤 1996: 101〕」のだ。

我々は通常、対象といわば「適当な距離」を保っている。対象と何かしらの関係を持つことが可能な近さにいながらも、それは完全にその対象と一体化してしまうほど近いというわけではない。また主体が対象に働きかけても、まったく反応を示してくれないときや、対象がまったくどうにも主体の思い通りにいかないとき、主体は対象から離れ、独立あるいは孤立していると感じる。しかし独立し対象と離れているとはいっても、その対象に働きかけることができるだけの近さにいる。これがいわば「適当な距離」であり、この微妙な距離を保つことが「正常」・「健全」と言われる。熊楠はこの「距離」が非常に極端だったと言える。粘菌などの対象と同

一化してしまうほどの近さにいるかと思うと、今度は、「奇人」・「変人」と呼ばれるほど他人から遠く、「適当な距離」から「逸脱」した行為をとった。

熊楠の「あり方」は非常に離人症的だったと言えるかもしれない。<sup>7)</sup> 木村敏によると、離人症患者は「物が苦痛なほど近くて自分を支配する[木村 2001a: 14]（傍点—唐澤）」感覚と「物がひどく遠くて世界が疎隔され[木村 2001a: 14]（傍点—唐澤）」ている感覚に苛まれるという。そしてそのような極端な「近さ」と「遠さ」は自己の消滅、人格の死という不安を引き起こす。

また統合失調症（精神分裂病）では、患者は極度に「この「近さ」に対して恐れを抱[木村 2001b: 248]」くようになるという。その理由を木村は以下のように述べている。

自分自身が絶えずそこから自分にならねばならぬところの場所、つまり以前われわれが「気」の領域と呼んだところの自他の絶対的同一の場所からの自己遮断の試みの表現なのである。[木村 2001b: 248]（傍点—唐澤）

つまり患者は、自己と他者の「統一」状態=自他の絶対的同一の場所（そこにはもはや自己も他者もない）へ帰還してしまわないように、自己を遮断（自閉）することである。「統一」の場所へ帰還すること、自己と他者が完全に同一化してしまうことは自己が消滅してしまうことを意味する。そこで患者は極度に自閉し自己を守ろうとする。その結果、カウンセラーが患者に対峙した際、「患者との内的な一致を妨げる障壁」や「奇妙な独特な感じ」あるいは

「とりつくしまがない」[木村 2001b: 248]といった印象へつながる。

熊楠は「狂人」にならないために「採集」や「観察」を行った（2章参照）。そして集中して「採集」・「観察」を行うことで、対象と極端に近くなった。瞬間的には対象と同一化していたかもしれない。しかし永くはその状態には留まらなかった。なぜなら、同一化の状態に留まることは、自我の消滅・自己の無化・人格の死であり、それはつまり熊楠が患った「狂人」になってしまうことを意味するからだ。そこで再び熊楠は対象との「距離」をとる（分離する）ことになる。しかし近すぎた「距離」は、今度は逆に非常に遠くなってしまう。それは「狂人」を恐れての反動だったのかもしれない。つまり、熊楠の場合、対象と「半端な距離（適当な距離）」をとってしまうと再びすぐに同一化（狂人化）してしまうかもしれないから、対象からできるだけ遠くに離れて「安全」・「健全」・「健康」な状態を保とうとしたのではないだろうか。あるいは熊楠の、自己が消えてしまうことへの不安が、より一層自我を確固としたものにしようとしたために、彼を統一状態からも他者からも遠く離れさせたとも言える。つまり「逸脱」するとは、熊楠にとって自我を確保せんがための狂奔でもあった。

熊楠は他者から極端に離れてしまうため、彼の行為は「奇人」・「変人」的なものになってしまった。そしてあまりにも離れすぎた「距離」に自ら気づき<sup>8)</sup>、それを埋めるため、そして完全な自己像を求めて再び「採集」・「観察」へのめりこむ……。このような繰り返しが熊楠の生き方には見られるようと思われる。

我々は普通、この「距離」をほぼ一定に保つ

ている。「距離」とはいわば我々の生きている文化が決定するものである。アニミズムやトーテミズムを信仰する文化における自己と対象の「距離」のあり方と、個人主義、科学技術重視の文化におけるそれとはやはり異なる。

熊楠が天才・超人と呼ばれる所以は、この「距離」の振幅の大きさにあると思われる<sup>9)</sup>。つまり他者との「距離」が極端に離れることによって、「逸脱」した思考・他者に囚われない斬新な考えを生み出すことができ<sup>10)</sup>、極端に近くなることによって、他者（自己）を内部から直観することができた。「適当な距離」をなかなかとることができなかつた熊楠は「狂人」になることを恐れたが、このラジカルな「距離」のとり方こそ南方熊楠という人物を最も特徴付けていると言うこともできる。

熊楠は常に極端な「距離」にありながらも、死ぬまでかろうじて「狂人」にはならなかつた。完全な「同一化」と絶対的な「遠さ」は両方とも自己の無化、他者の消失を意味する。熊楠は常に「狂人」と隣り合わせにいたが、それでも彼は生涯自分を完全に見失うということはなかつた。熊楠は「狂人」を恐れ、またいつ自分がそうなつてもおかしくないと思っていた。自らがいつも「狂人」と隣り合わせにいることを自覚していた。しかし現実にそうなつたのは熊楠ではなかつた。彼の愛息・熊弥が統合失調症という形で体现してしまうことになる。それは熊楠にとって耐え難い悲しみであったに違ひない。

もし熊楠が「狂人」になることを恐れていなかつたら、自我の消滅・人格の死を本当に忌避していなかつたら、彼は那智山から下りてくる必要はなかつただろう。ひたすら人との接触を

避け「採集」・「観察」に没頭すれば良かった。しかし熊楠は突如として下山し、以後田辺に定住する。彼が深山幽谷の那智山から「さびしき限り<sup>11)</sup>」の生活を切り上げ下山した理由は、しばしば熊野での「植物調査が完了したため<sup>12)</sup>」などと説明される。しかし実際は、これ以上那智山に独居することに、自我崩壊の危険を感じたからだった。

那智山に籠ること二年ばかり、その間は多くは全く人を避けて言語せず、昼も夜も山谷を分かちて動植物を集め…（中略）…那智山にそう長く留まることもならず、またワラス氏も言えるごとく変態心理の自分研究ははなはだ危険なるものにて、この上続くればキ印になりきること受け合いという場合に立ち至り、人々の勧めもあり、終にこの田辺に來たり……〔1911.6.10-18『和歌山新報』掲載『千里眼』〕〔南方 1973: 7-10〕

那智山隠棲の後期（1904年頃）、熊楠の精神は極限状態にあった。熊楠が那智山でこれ以上研究を続けることは精神の崩壊・自己の「死」つまり狂人になること（キ印になりきること）を意味した。孤独に「採集」・「観察」を続けていくうちに、熊楠は研究対象である生物と一体化し、自分の存在が薄れていくのを感じていた。あるいは他人との接触がほとんどなかつたため、自己存在を自覚できなくなってしまったのかもしれない。そのような状況における自我の変化を熊楠は日記等に詳細に記録している。

熊楠が下山した真の理由は、植物採集が完了したためなどという単純なものではなく、自分

が同化し溶け込んだ生物あるいは山全体から分離し、自我を保つためだったと考えられる。

## 7.まとめ

熊楠は、好んで自分の肖像写真を撮った。その数は膨大である。なぜ熊楠はここまで多くの自分の写真を撮ったのか。特に上半身裸でたばこをくわえながら腕組みをして写っている写真（林中裸像）[中瀬ら編 1991: 118]や、浴衣を表裏逆に着て写っている写真[中瀬ら編 1991: 152]などは、彼の自己主張のようなものが感じられる。熊楠は自分の写真を撮ることで、自分の存在を確認しようとしたのではないだろうか。常に自己の消失と隣りあわせだった彼は、自分の肖像写真を撮ることで自己存在を顕在化しようとしたのかもしれない。

本稿では、熊楠の「採集」・「観察」行為を「取り込み同一化」と「投影同一化」と比較して述べてきた。それらの行為は熊楠自身が述べるように、彼が「狂人」にならないための、そして不安定な自我を守るためのいわば「防衛機制」であった。熊楠は対象との「同一化」を求めていたと言える。「採集」は自己へ対象を取り込むことによる、「観察」は対象へ自己を投げ入れることによる「同一化」であった。そして熊楠が選んだ対象は、彼の「純粹な反対」、彼の欠如した部分を持つものであり、いわば彼自身であった。例えば粘菌、特に原形体は熊楠の「アニマ」を具現化したものであったと言える。

しかし一方で、欠けた部分を補完して完全性へ帰還することは、自我の消滅・自己の死でもある。なぜなら、対象と同一化し完全性を取り戻すことは、対象の消失を意味し、対象が消失した場において主体だけが存在することはあり

えないからだ。

「同一化」は自己の欠けた部分を補完する点においては理想とされるべきものであるが、それには自我の消滅・人格の死が伴うという点で、恐るべきものもある。熊楠は対象と完全に同一化していたのではなく（瞬間的には同一化していたかもしれないが）、同一化に極めて近い「距離」にいたと言える。それは「狂人」になるのではないのかと、逆に彼を不安にさせた。そこで再び対象と「距離」をとった（分離した）。しかし、熊楠は対象との「距離」のとり方が非常に苦手であった。彼の様々な「逸脱」した行為はそれを物語っている。他者からあまりに「逸脱」した行為をとるために彼は「奇人」・「変人」と呼ばれた。しかし「狂人」ではなかった。熊楠はかろうじて「奇人」・「変人」に留まっていた。しかし、何かの拍子で「狂人」へ移行してしまう可能性は十分あった。それを防ぐために熊楠は再び「採集」や「観察」に全精力を費やしたのだった。そして彼の驚異的な集中力による「採集」・「観察」は対象との「距離」を極めて近くした。また、その対象として選ばれたものは、自らの欠如した部分を持つ、あるいは欠如を補完してくれるものであった。そして欠如を補い「完全性」を求めて「採集」・「観察」に没頭した。このような循環を熊楠の生き方に見ることができる。

熊楠が、森の中でくわえたばこに裸で腕組みをしている写真（林中裸像）と、縁側で眼鏡をかけて一心不乱に菌類を写生している写真[中瀬ら編 1991: 112]を見比べてみると、本当にこれが同一人物かとさえ思えてくる。しかしこの2つの写真は熊楠という人物を最も象徴的に表していると思われる。一方は豪快で何にも囚わ

れない奔放な熊楠像を、一方は観察対象に入り込もうとする繊細で神経質な熊楠像を表している。

熊楠と対象との係わり合いを深く考察していくとき、これまで多くの書物等で語られ、そして我々の多くがイメージするようになった、彼に対する「強靭な精神を持った森の巨人像」とはまったく正反対の、「狂人」を恐れながらも常にその近くにしかいることができなかつた「不安定な自我の持ち主」という一面が見えてくる。

熊楠は常に自我の消滅・人格の死と隣り合わせにいた。それは熊楠にとって苦しみでもあつただろう。しかしそれが彼を極めて特異で魅力的な人物にしていることも確かである。

柳田國男は熊楠を「日本人の可能性の極限」と評した。「可能性の極限」とは、言い換れば「自己の消滅の限界」のことでもある。つまり自己を失わずにどこまで対象と近づくことができるか、あるいは離れることができるか、それが人間としての可能性を發揮できる限界だと思われる。自己を失わずに、自己と対象が完全に消えてしまうギリギリ限界まで近づき、もしくは限界まで離れることができたとき、「通常」の見方を超えた見方・考え方・行為ができると思われる。そしてそれができた人物こそまさに「南方熊楠」だったということができる。

〔投稿受理日2008.09.27／掲載決定日2008.11.27〕

#### 注

(1) 牧野富太郎（1862-1956）は「植物ことに粘菌について、それはかなり研究せられた事はあった様だが、しからばそれについて刊行せられた一の成書かあるいは論文かがあるかと言うと私は全くそれが存在しているかを知らない」(1942.2「南方熊楠翁の事ども」) [飯倉ら編 1991: 309]と述

べ、山本幸憲は、「私が思うに、まず最大の欠点に、自分で多くの新種名をつけておきながら、裸名で残したことが挙げられる。これは無責任である。」(2005.12「変形菌研究と南方熊楠」) [松居ら編 2005: 86]と述べている。

- (2) 「防衛機制」とは、S・フロイトによって提唱された概念である。それは精神的安定を保つための無意識的な自我の働きとされ、「取り入れ」や「投影」以外では、例えば「抑圧」や「転換」「隔離」「反動」「退行」などがある。
- (3) 熊楠は1897年11月に大英博物館内でイギリス人を殴打し入館を差し止められている。翌月には復帰するが、1898年12月、館内で女性の高声を制したことから再び紛争を起こし、これが決定的な原因となり同館を追放されることになった。
- (4) 「…又出、家の老婆を打、巡査と争い入牢」(1898.11.17付日記)など、特にロンドン時代の日記には女性に暴力を振るったり激怒したりする記載が多く見られる。
- (5) 特に、ロンドン時代後期の日記には、彼の病的なまでの過剰憤怒・暴力行為が見られる。「チャイナマン」とある女児からからかわれ、この女児を傘で殴る(1900.5.8)など、多数の騒動を起こしている。
- (6) 精神医学の見地から熊楠を分析している近藤俊文は「…明治30年4月28日には、ロンドン寄港中の軍艦富士のふるまいに酒に酔った熊楠は、女性が嘲笑したとして、暴力をふるったあげく、警察署に留置される。留置されてもなお暴れて、巡回をてこずらせた」と書いている。なにか、それを自慢しているかのようにも読める。」[近藤 1996: 101] (傍点—唐澤)と述べている。
- (7) 熊楠は「癲癇」だったと言われているが、その症状の特徴には例えば「対人的な距離を置かない馴れ馴れしさ[木村 2001c: 235]」や「離人症様の現実疎隔感[木村 2001c: 227]」などがあるという。その他にも「癲癇」の特徴は多々あるが本稿ではそこまでは踏み込まない。また私は熊楠と対象の関係や彼の天才的能力の全てを「癲癇」という脳の疾患だけに帰すつもりもない。脳の構造に全てを還元し特殊化し疎隔するのではなく、熊楠と対象の関係のあり方、その意味を我々の側に引き寄せて考えることこそが重要であると考える。
- (8) 「…自分このことに気がつき…」(1911.10.25柳田

- 國男宛書簡) [南方 1971: 211] (2章参照) とあるように、熊楠は離れすぎた自分の位置をかろうじて自覚できる「距離」にいた。もし熊楠が完全に他者から離れてしまっていたら、そこにはもはや他者だけではなく自己(熊楠)も存在しない、いわば「狂人」の領域に入ってしまっていただろう。
- (9) 神坂次郎は、「天衣無縫ともいるべき熊楠の行動は、振幅が大きい。いま先刻まで腰巻ひとつの半裸で狂気のように研究に打ちこんでいたかと思うと、こんどは浴びるほど酒を飲み、ふらっと採集中でかけたまま10日も20日も帰ってこない。たまに帰ってくると、家じゅうにばらばら虱を落として歩く……」[神坂 1987: 311] (傍点一唐澤) と熊楠の特徴を述べている。
- (10) 有名な「神社合祀反対運動」は彼のいわば「逸脱」した行動・思想の表れでもあった。この運動において熊楠は「エコロジー」という当時の日本においては極めて斬新な思想を表した一方、家宅侵入・暴行罪のかどで数日間拘留されたりもしている。
- (11) 「1925年1月31日-2月2日 矢吹義夫宛書簡」(いわゆる「履歴書」)において熊楠は、「かくて小生那智山にあり、さびしき限りの生活をなし、昼は動植物を觀察し図記して、夜は心理学を研究す。」[南方 1971: 31]と那智山での暮らしぶりを振り返っている。
- (12) 例えば中沢新一は「明治37年(1904年)9月30日、熊楠の熊野植物調査は完了し、いよいよ彼は山を降りる」[中沢 1992: 43]と述べている。

#### 参考文献

- 飯倉照平・長谷川興蔵編 1991『南方熊楠百話』、八坂書房
- 氏原寛・小山捷之・東山紘久・村瀬孝雄・中山康裕・山本格 1992『心理臨床大事典』、培風館
- 小此木啓吾 2002『フロイト思想のキーワード』、講談社現代新書
- 河合隼雄 1976『ユング心理学入門』、培風館
- 木村敏 2001a「離人症の現象学(1963)」、『木村敏著作集1 初期自己論・分裂病論』、弘文堂
- 木村敏 2001b「自覚の精神病理(1970)」、『木村敏著作集1 初期自己論・分裂病論』、弘文堂
- 木村敏 2001c「時間と自己(1982)」、『木村敏著作集2 時間と他者/アンテ・フェストゥム論』、弘文堂
- 神坂次郎 1987『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』、新潮文庫
- 近藤俊文 1996『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店
- 鶴見和子 1981『南方熊楠—地球志向の比較学—』、講談社学術文庫
- 中沢新一 1992『森のパロック』、せりか書房
- 中瀬喜陽・長谷川興蔵編 1990『南方熊楠アルバム』、八坂書房
- Hegel,G.W.F. 1807 *Phänomenologie des Geistes* (邦訳: 横山鉄四郎 1997『精神現象学(上)』、平凡社)
- 松居竜五・岩崎仁編 2005『南方熊楠の森』、方丈堂出版
- 南方熊楠 1973『南方熊楠全集6』、平凡社
- 南方熊楠 1971『南方熊楠全集7』、平凡社
- 南方熊楠 1972『南方熊楠全集8』、平凡社